

## kurabeteyomu - MAR06\_10.20170106 - 解説動画の文字起こし (Vrew/Whisper) 文章化 (OpenAI o1) Kanno Kazuhiko

---

### マルコ福音書の分析：6:14-8:26 / 8:27-10:52

---

マルコ福音書の6章14節から8章26節と、8章27節から10章52節の分析を行いました。まず、これら2つの区分は大きなまとまりになっているということが分かります。出だしと終わり、さらに次の出だしと終わりで切り分けられるというところがあり、11章からはエルサレムに上る場面へと移っていくので、この6章から10章にかけての部分が2つの大きな固まりとして位置づけられていると考えられます。

---

6章から始まる部分では、「バプテスマのヨハネはいったい誰なのか」という話が登場し、預言者を殺す場面があります。ここでバプテスマのヨハネの死とよみがえりが示唆される短い描写から始まって、最後は盲人が癒される場面で終わります。続く区分（8章27節から）では、イエスは「人々は私を誰だと言っているか」と問いかけ、バプテスマのヨハネのようだとか預言者の一人だという声がある一方、「あなたはキリストです」という告白が初めてはっきり語られます。ここでイエスは初めて「十字架の苦しみを受けて殺され、3日目に蘇る」ことを予告し、「命を捨てなければ自分の命を失う」という教えに入ります。そして、同じく最後の部分では「ダビデの子イエスよ、憐れんでください」という盲人（信仰によって癒される）で結ばれます。つまり、バプテスマのヨハネと預言者の殺害、死とよみがえりの予告、盲人の癒しという構図で大きく囲まれている。その中身はさらに4つずつに区分されるのだろう、というわけです。

---

分かりやすい平行としては「5000人に食べさせる奇跡」と「4000人に食べさせる奇跡」があり、「よみがえり」といって始まった十字架と復活に関わる部分では、弟子たちが「誰が一番偉いのか」と議論したり、「私を右と左に座らせてください」と願ったりする箇所が対になっているように見えます。そこでそれぞれを6つの段落に分け、互いに平行関係にある箇所があると考えられます。

まず8章までの区分を見ると、「天からのパン」に関して悟っていないという場面があり、嵐が起こったときにパンのことを悟らず、次に4000人を食べさせる話の後でもまだ論じ合っていて、パンダネのことだとイエスが言っているのに悟らない、という並行があります。つまり5000人のパンで悟らず、4000人のパンでも悟らず、と続きます。そこに挟まれているのがパリサイ人の一団が登場し、「なぜ手を洗わないで食べるのか」と問題にする汚れについての教えで、パリサイ人の偽善が指摘されます。イエスは「口から出るものこそ人を汚す」と述べており、パリサイ人の偽善についての話をされた後、次の場所へ移ります。

鶴の地方では、異邦人の女が娘の悪霊を追い出してほしいとイエスに願い、悪霊は追い出されます。一方で耳が聞こえず口のきけない人を癒す場面も登場し、こちらも噂が広まります。耳が聞こえず口のきけない状態はまるで霊に取り憑かれているような描写もあり、悪霊を追い出すことと癒しの奇跡が対比されているようです。また、「パリサイ人とヘロデのパンダネに気をつけよ」というイエスの警告は、パリサイ人の偽善と結びついていると考えられます。こうした教えの並行が「5000人にパンを与えた奇跡」と「4000人にパンを与えた奇跡」の間に挟まれ、さらに汚れや悪霊についての話が展開しているというわけです。

---

次に8章27節からの区分では、イエスが弟子たちに「キリストである」ことを明かした後、十字架と復活を予告し、これを何度か繰り返します。その中で「復活の山に登る」――すなわちイエスが栄光を現す山の場面（変貌山）に、エリヤとモーセが現れるところが出てきます。ここでは特にエリヤが登場するので、カルメル山を連想させる部分もあるかもしれないし、またはシナイ山も連想されるかもしれません。そして山から下りてくると、他の弟子たちが霊を追い出せなかったという場面があり、イエスはそれを「信仰があるのかどうか」という視点で諭されます。

さらに、弟子たちが「誰が一番偉いのか」と議論したり、またはヤコブとヨハネが「主の右と左に座らせてほしい」と求めたりする場面が繰り返し出てきます。この「誰が偉いのか」という問いに対してイエスは、命を捨てる者、仕える者こそが偉いのだと教えます。ここでは「自分の十字架を負い、命を捨てなければならない」ということが強調され、イエスの十字架と3日目のよみがえりの予告と結びついています。

一方で、「離婚の問題」や「金持ちの青年が永遠の命について問う」場面もこの区分の中に含まれ、いずれもモーセの立法との関わりがテーマになっているように見えます。離婚の許可についてパリサイ人がイエスを試みる場面では、「あなたがたの心がかたくなだからモーセはやむを得ずそれを許したのだ」というイエスの言葉が示されています。この部分も、パリサイ人や律法の捉え方に関わる偽善が批判されている流れの一環といえるかもしれません。幼子を受け入れることや、すべてを捨てて初めて神の国に入ることができるという教えも、ここで示されています。

総じて見ると、6章～8章26節までは「教えを悟るか悟らないか」というテーマが中心にあり、5000人・4000人に食べさせるパンの奇跡、パリサイ人の偽善、汚れや悪霊からの癒しなどを通して、「悟りがあるかどうか」が問われています。8章27節～10章52節では「復活を信じるかどうか」が中心テーマとなり、イエスが十字架とよみがえりを繰り返し予告される中で、弟子たちがそれをどう受け止めるのか、また「使える者こそ大きい」という価値観が繰り返し示されています。前半は「教えの理解」、後半は「信仰の問題」と言ってもよいかもしれません。

マルコ福音書の1章～3章では十二弟子を選び、権威を与える場面が描かれますが、6章以降は選ばれた弟子たちが教えられ、訓練される過程として読むことができます。つまり、悟り（理解）と信仰が試され、与えられていく段階が6章から10章にかけて形成されているのではないかと――そうした構造として捉えられるのではないかと、というのが今回の分析の大きな要点です。